

<論文>漱石の出発点-子規によって培われたもの

宮下, 今日子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1989-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019567>

漱石の出発点——子規によって培われたもの

宮 下 今日子

漱石は厭世感を早くから抱いていた。しかしその厭世感が初めておもてに現われるのが、子規宛の書簡の中であったことは、意外に忘れられている。それは明治二十二年九月二十日付の書簡の漢詩五言絶句の中によってわかる。この場合厭世感は、「高逸」という世俗を超越する姿勢となつて現われている。

△ 抱剣聞龍鳴 読書罵儒生 如今空高逸 入夢美人声

第一句は成童の折の事 二句は十六七の時 転句ハ即今の有様
御坐候

(少年時代は血気盛んで、書物を読んで学友を罵ったりした。今ではうつろにも世俗を超越し、夢で美人の声を耳にするばかりである。佐古純一郎「漱石詩集全釈」による)▽

この頃の漱石の厭世感の主な原因としては、江藤淳のあげた、兄嫁との恋愛の苦悩や養子説などが上げられる。あるいは、それとま

ったく基軸を異にした小沢勝美氏の説があり、ここでは透谷の民権思想との関係で、同年生まれの透谷と漱石の接点によってさぐられた視点から展開されている(注一)。氏はやはりこの書簡を掲げながら、これを明治二十二年の明治憲法発布後の国権主義的な潮流が高まってきたこの時期に重ねあわせて、知識人の挫折と諦観がその原因であるとみているのである。確かに明治二十二・二一・十一日の憲法発布が人々、ことに知識人に与えた影響は大きい。しかしそういう原因よりも、この厭世感が前掲の子規に向けられた手紙で述べられた種類のことであった点や、後の書簡の中でもやはり展開されてゆく漱石の厭世感のあり方を見ていくと、それとはまた別の厭世感が見えてくる(後述)。

漱石の厭世感の原因として何より上げなければならぬことは、この時期彼が愛着を抱いていたのが漢文学であったにも拘らず、新知識としての西洋文学専攻が、強いられたものとしてあった、という不快感からくる厭世感であった。しかも子規があっさりと大学を

中退して、型破りな生き方をし、ある意味で学歴社会の枠組から自由であったのは反対に、漱石は大学というものから離れることができず、常識的な生き方を選んだ。そこに窮屈な自分を感じていたようにも思える。漱石にとって子規は、学校という制度の枠の外で、伸びやかな精神のありかたを保証してくれる対象であった。そして子規が芭蕉崇拜の当時の文壇に疑問を抱いて、明治の人間にふさわしい言葉の創造、つまり俳句革新に向かって行った時、漱石は漢詩と英文学を結ぶ普遍的な視点で「文学」を統一的に攪む方向に向かおうとしていた。以下ではその漱石の苦心の後を辿ってみてみる。

この漢詩を送った後の子規宛の書簡を見ても、かなり厭世的な内容が書かれている。それは次のように始まる。夏休みに、漱石は子規に、休み中に大奮発大勉強して、新学期に子規をおどかさうと思ったが、毎日八朝一度昼過ぎ一度、廿四時間中都合三度の睡眠なりVと書いて、その意志が挫けた事を伝えている。しかも八爾後眼病兎角よろしからず、其がため書籍も筆硯もことごとく皆放抛の有様にて長き夏の日を暮らしかね不得已くくり枕同道にて華胥の国黒てん之郷と遊びあるき居候得共……(略)此頃は何となく浮世がいやになりどう考へても考へ直してもいやでいやで立ち切れず去りとして自殺する程の勇氣もなきは矢張り人間らしき所が幾分かあるせいならんかVと、かなり弱音を吐いている漱石であるが、この厭世感については、先に述べたように多くの人がその理由を推測しているのだが、この手紙のあとのところでは「ファウスト」の絶望に自分自身を重ね、それはまるで若者特有の悟り切ったかのような厭世

感であるようにもみえ、また文学青年にはよくありがちな厭世感であるようにも受けとれるが、果たしてどうだったのだろうか。

「三四郎」で主人公が大学に入って初めて図書館に入った時に、その書物の多さに驚いて、やりきれなさを感じるところが描かれているが、この時の漱石にも、学業の前途に対する不安や焦りがあっただろう。それは青年特有の悩みとして当時の読者にもむしろ共感される場所があっただろう、とすればなおさら漱石一人の問題ではなかったはずであり、子規には漱石のこの厭世感におけるきどりや高逸に遊ぶポーズを見抜かれていたらしく、次のような返事を送っている。

△何だと女の祟りで眼がわるくなったと、笑ハしゃアがらア、此頃の熱さでハのぼせがつよくてお気の毒だねへといハざるべからざる厳汗時節の、自称色男ハさぞさぞ御困却と存じ候(略)朝寝ハのら息子、昼寝ハ盗人と相場の決まりたるものを得意顔にいざるとハ笑止の至り也夢中の美人を畫にかいた牡丹餅よりもはかないものとも知らず之を樂しむハ君等未だ色男の堂に上らざるが故ならん。

「此頃は何となく浮世がいやで立ち切れず」ときたから又横に寝るのかと思へバ今度ハ棺の中にくたばるとの事、あなおそろしあなをかし、最少し大きな考へをして天下不大瓢不細という量見にならでハかなハぬこと也 けし粒程の世界に邪魔がられ、うじ虫めいた人間に追放せらるるとハ、てもさても情なきことならずや……V

この江戸っ子気質の漂う文体にある洒落と口の悪さは、二人の会話を典型的に示す好例といえ、全体的に彼等の書簡は、ウマが合った交流の楽しさであふれていて、読み手を心地よくさせるものがある。それにしてもここにはかなり辛辣な言い廻しもあって、實際眼病で本も読めず苦しんでいた漱石も、子規のからかいめいた言葉には、少々憤慨したものとみえて、この様な返事を送りつけた。

△さすが詩神に乗り移られたと威張られる御手際読み去り読み来て河童の何とかの如くならず天晴れ晴れかっぱれかっぱれと手を拍って感じ入候 然し時どきハ詩神の代りに悪魔に魅入られたかと思ふ様な悪口あり 君此頃大變傷をかつぎ出す事が好きになったから僕一偈を左右に呈すべし 毎朝焼香して此偈を唱へ此悪魔を祓ひ給へ (中略) 然し滑稽の境を越えて悪口となりおどけの旨を損して冷評となつては面白からず其も貴様の手紙が癪に障るからだとは言はれは閉口仕候 悟道徹底の貴君が東方朔の嚙語に等しき狂人の大言を真面目に攻撃してはいけない

お互いにふざけていて、余裕のあるところを誇示しているようでもあるが、この手紙の最後は幾分弁解気味で、自ら△嚙語に等しき狂人の大言▽といっているところを見ると、彼の厭世感というのものはやはり子規が見抜いたように、ある種の気取りを含んだものだったのであろう。自分のことを何でも知っている親友の子規だから打ち

明けられたわけで、「ファウスト」などを持ち出しているが、それはもっと取るに足らない個人的な悩み、突き詰めを欠いた厭世感に過ぎなかった。

この手紙に対する返事で子規も△僕毎年の夏休みにハ非常に大望を抱く故いつでも日が足らずして十分の一も出来たためしなし▽と書いて、自分も夏休みには猛勉強をして漱石をおどかしてやるとういう意気込みではあったが、果たせなかったと言って、やはり漱石と同じだったことをあげ、学生らしいやりとりを展開している。しかし子規の場合には漱石と違って、松山で俳句の会を開くために奔走していたということがある。その翌年あたりから子規が古俳句の分類に着手しているということを考えると、いよいよその準備にのりだしてきた時期となり、このあたりから次第に子規は漱石とはちがった道に踏み込んでいき、積極的な幸福な状態、つまり厭世感とは無縁な状態にあった点をおさえておきたい。

このことは前出の漱石の書簡の中にあつた、子規がいう△詩神▽と関係しているようだ。この△詩神▽というのは、漱石が厭世感から脱却する方法として子規があげたものであるが、さらにはエマーソンの詩の考え方を引きながら、自己の詩論を展開していて、この時期の彼の詩意識を知る上でも重要である。この△詩神▽というのは、当時日本に圧倒的な影響を与えたエマーソンが使用した△MUSE▽という言葉の翻訳であり、子規はそこから東洋の△隱遁▽をもちだして、陶淵明が△菊を東籬にとらんずんバ帰去來の賦▽ができなかったことと、紫式部が、石山寺にこもつて△山光水色を眉端にながめざれば▽「源氏物語」ができなかったことをあげている。

つまり我々は八塵の中にすめばこそ無垢清浄なる名文をもV得ることができないのだから、もし八我をして大河巨海のほとりに住ましめばV八我語ハ滔々洋々Vと文章が湧き出してくる、とかんがえていて、だから詩人にこの力を与えるものが八詩神Vである、というのが子規の意見である。このことに感服したのが先の漱石の「天晴れ晴れかっぱれかっぱれ……」という言葉であった。

子規は、詩人が浮世を一旦去る時に、詩神が得られるのだと考えているのだが、しかし子規が言っているのは、ただ浮世を去ればそれでいいとしているのではない。続けてこう言っている。

△此際にあたって詩人が無垢清浄、人間以外の詩思を得る也 其得時ハ猶詩神として存在する也是ニ於て詩人がまた浮世の詩人に帰て其得たる詩思を吐露する故に其詩ハ天の如く迦陵頻伽の如し 然るに今の詩人ハ未だ此境界をしらず漫に筆を弄して書き去り書き来る其詩を讀ミ下すに其音や河童の屁の如く其調やおさんが火吹竹を吹くが如し実ニ我我兎率天とそつてんより見れば彼等ゑせ詩家ハ濁世の糞の上に飛びかふ蒼蠅に似たりとやいはん……とV

つまり子規にとっては、浮世を去ることが大切なのではなく、去った後にもう一度八浮世の詩人Vとして俗世間に帰り、そしてその後世の中を凝視して書くことが大切だ、と言っているのである。このことをずっと力説してきて、書簡の最後を八我筆さきに花も咲けVという句でしめているところは、文学に新しい創造性を見いだ

そうとしていた彼の希望的な気持ち強く現わしている。この八詩神Vという概念には、西洋も東洋もなく、両者の文化を同じ射程に収めていて、二つを融合させた上で何とか自己の文学の魂とならんことを期した子規の思いがある。ここでは子規の場合（後に述べるように漱石も同様だが）、西洋と東洋が、優劣の關係に置かれていたのでなく、双方が文化的視点から摂取されていたことに注目しておきたい。従って子規が俳句分類の仕事に携わってゆくにあたって、今の詩人を八濁世の糞の上にとびかふ蒼蠅Vだと酷評していることに加えて、この八詩神Vという考え方は、子規の俳句革新の情熱をささえる、重要な発見であったろうと想像できる。そしてこのことは、芭蕉が俗のなかに新しい俳諧の世界を築いたことと、また蕪村が八俳諧は俗語を用いて、俗を離るるを尚ぶVといった事と重なってくる。子規が古俳句分類から摂取したものの重さは、計り知れない。

しかし漱石は、この子規の八詩神Vという意見を聞いても、結局自分は八浮世ハ矢張り面白くもならずVと子規に書き、その後箱根の温泉に療養がてら出かける。漱石にとっての脱俗は、俗世間について疲れた気分をすこし休ませようとするようなもので、現世への一つの挑戦であった古来の隠遁者のポーズをとっているようでも、根本的には単なる現実逃避の域を出ていないように思える。何よりもそれはこの時に作った漱石の一連の漢詩のなかにうかがえる。

△ 函山雜咏 (五)

百念冷如灰 百念 冷やかなること灰の如く

靈泉洗浴埃 靈泉 俗埃を洗う

鳥啼天自曙 鳥啼いて 天自ずから曙け

衣冷雨将来 衣冷ややかにして 雨将来たらんとす

幽樹没青靄 幽樹 青靄に没し

閑花落碧苔 閑花 碧苔に落つ

悠悠帰思少 悠悠として帰思少なく

臥見白雲堆 臥して見る 白雲の堆きを

(もろもろの雑念もすっかりさめ、心はまるで冷灰のように
平静である。靈験あらたかな箱根の湯は、浮世の穢れをすっ
かり洗い清めてくれた。鳥の鳴く声により夜は自然に明け、
衣にしみ透る冷気で、今にも雨が降って来そうだとわかる。
こんもりと生い茂った樹木はあおがすみに紛れ、ひっそりと
咲く花はあおごけに花びらを散らしている。悠悠自適の境地
となった今は、もはや東京に帰りたいたいと思う気持ちもうす
れ、寝そべって白雲の積み重なる変容を眺めている。——訳
は前掲の佐古氏) √

この漢詩は厭世感に捕らわれていた漱石が、浮世の煩わしさを捨
てて箱根に逗留した時に創られた連作の一部であるが、この句には
確かにある解放感を感じられるが、△靈泉√が△俗埃√をあらうと
いう発想や霧や花のイメージは月並みであり、その風景の中に精神
を解放した、というよりも、やはり気分を転換させているに過ぎな
い。それは東京に帰る日が近付いてくるに従ってよんだ、連作の中

の次の漢詩のなかに顕著に現われてくる。

△ 閑を得ること二十日 塵寰を去り

囊裡錢無くして自ら還るを識る

自ら仙人と称する俗累多く

黄金を用い尽して青山を出ず —— 同前 √

この詩に対して子規は、△「仙中に俗あり、仙は未だ必ずしも仙
ならず。漱石は猶お是れ俗界の人なり矣、呵々」√と批評している
のだが、その通り漱石にとっては、俗世間と自然とがあくまで別々
のものとしてあり、環境によって左右されているだけの自分に気付
いていない。ここでは漱石の厭世感の原因を云々するよりも、彼の
そこからの脱出の意志が希薄であったことを押さえておきたい。

しかしその後の明治二十三年十月二十四日付の子規宛書簡の中
で、その前に子規から送られていた漢詩に次韻して、次のような漢
詩を書いている。今全句をあげることはやめるが、その最後の句
で、漱石は△多情縦い絃歌の巷に住すとも漠漠たる塵中 傲骨清し
(多情な君が歌の流れる巷に住んでも、その広い塵中であつ
て、君の傲骨は清らかなままなのだ 同前)√といつて子規を賞賛
している。これは子規が自分の生きる目標が、決して功名心のため
でなく、筆をもって生きることだと述べ、それが俗世を捨てようと
塵芥の中であろうと、いつも自分は△詩天酒地一心清く√いられる
のだ、と詠んだ内容を受けている。つまり漱石は、子規が塵中にあ
っても清い精神を保っていることを賞賛しているのである。これは

子規を自分の内なる読者にする事によってえられた、塵中から逃避していた漱石にとっての新たな価値転換ではなかっただろうか。これら漱石の厭世感をめぐっての二人の手紙のやりとりは、数少ない彼等の書簡の中で、興味深い応酬となっており、漱石の自己形成の過程の中では、重要な位置を占めてくる。そして漱石は、この子規の助言をバネとして、この問題を、一つは教師として生きていく際に、一つは学問研究の中に、そしてもう一つは「ホトトギス」の活動のなかに、積極的な方向で深めてゆくのである。

明治二十四年から二十九年までは、子規にとっては、先に述べたように、古俳句の分類に着手しだした頃であり、その為大学ではたびたび落第していて、もはや大学というところへの関心を失っていたとみえて、結局子規は大学を中退してしまふのである。しかし漱石にとっては、大学を棄てるわけにはいかなかった。かれは随分子規を心配して、 \wedge 鳴くならば満月になけほととぎす \vee という句を寄せて、とにかく大学を卒業したほうがいい、という分別をわかまえた意見を吐いている。ここには明らかに、もうそれぞれ別の道を歩み始めている二人の姿がある。その後子規は、非常に安い給料（その頃の大卒の給料の三分の一ぐらい）で、「日本新聞」に就職して、俳句の記事を次々と発表していくのである。子規がこの俳句の革新にかけていくこの時期に、漱石も又、大学の卒業を間近にして、先ほど述べたように、かなりの論文を発表している。

このようにそれぞれ別の道を歩き出した二人であり、この頃からぐっと書簡の数が減ってはいるが、それでも漱石の書簡を見ると、

子規に対して自分の生き方の不安を絶えず打ち明けていることがわかる。そして文学上のことに関しては、一切あげていないことが、むしろ特徴的であるともいえる。（もっともこの頃から子規は漱石にとって俳句の先生になってゆくのだが。）この時期の子規は、先にあげた通り、彼のライフワークとしての、芭蕉から蕪村にいたる古俳句の分類に着手し始めていて、それは死ぬまでに、大人の背丈ほどに積み上げられるが、そのあと明治二十五年から「獺祭書屋俳話」を書き、芭蕉論をかき、俳句の仲間を次ぎ次ぎに増やしてゆき、そして後にそれが「ホトトギス」の発刊となって、全国的な規模で広がっていった。それは中央志向を排して、各地の文化を掬い取るうとする運動でもあった。やはり、この時期は子規にとっては夢中で過ごした期間で、非常に活動的なものだったに違いない。

総じて子規は常に活動的だったが、それは新聞記者という職業のためでもあっただろうし、また活動の場が俳句会という集団性を帯びるものであったため、いわゆる個人作業である小説家というものとはその活動の場において、全く違う文芸の \wedge 輪 \vee を持つものであった。松山の漱石の下宿「愚陀仏庵」には、従軍から帰ってきた子規が転がり込み、ここを拠点にして句会を開いている。今松山に子規記念館という立派なものができていて、そこでは句会の様子を、その下宿の建物とともにテープをながして再現している。俳諧連歌の世界に「座の文学」といわれる側面があったように、この「ホトトギス」の集団の文芸というものの文学的価値はもっと積極的に取り上げてよいように思う。しかも、後に記すように、漱石の「倫敦消息」にみられる文体は、そのあと「猫」の写生文に反映されてゆ

くのだが、「猫」に集まる知識人たちの生態が、こうした俳句会におけるある雰囲気（集団であることの面白さ）をそのまま反映していることを考える場合にも重要である。

△あさがをや 君いかめしき 文学士 ∨

さて一方漱石はこの後どうであったかという本題にはいることにする。この句は「子規句集」の明治二十六年、△漱石来る∨として詠まれたもので、漱石が子規のうちへ遊びにきた時、顔を見るなりいきなり子規が詠んだもので、恐らく、最も漱石的な風貌をつたえているものではなからうか。あるいは又、文学士になれなかった子規の軽い揶揄とも受け取れる。漱石は卒業後大学院に進むが、傍ら東京専門学校（現在の早稲田大学）の英語の教師を務めている。しかし手紙から判断すると、どうも何かいわれのないことで、辞職勧告をされそうになっていた様であり、それに関して子規が何か救援活動を行っていた節があることが分かる。漱石は生徒の要求で自ら受け持ち時間を増やしたりと、その責任感の厚さを思わせるものがあり、いつも生徒主体で、教授法にも熱心な教え方を見せている。そしてその後も東京で何度か教え、さらに松山、熊本と渡り、最後に英国から帰って英文学を教えるのだが、ついで教職というものに満足しなかった。学校を辞めたいということをよく子規に書いているのだが、子規は何度もほかの仕事を探してやったりしている。しかし漱石ははっきりした返事をしていないようで、子規にも漱石が何を考えていたのか本

当のところは分からなかったようだ。

△小生の目的御尋ね故御明答申上たけれど実は本人自らが所謂わが身でわが身が分からない位故到底山川流に説明する訳には参り兼候へども単に希望をられつするならば教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり換言すれば文学三昧にて消光したきなり 月月五六十の収入あれば今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覚悟なれど遊んで居って金が懐中に舞ひ込むといふ訳にもゆかねば衣食丈は小々堪忍辛抱して何かの種を探し（但し教師を除く）其余暇を以て自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書かん事を希望致候∨

確かに一面呑気なことを言っているようにも受け取れる。しかし明治二十五年には「中学改良策」を書いて、非常に熱心な教育者であったことをしめしており、そこでは実に多岐にわたってその改良案を提出していた（注二）。しかし現実の現場では、実際にその矛盾した姿を目の当たりにして様々な教育の弊害にぶちあたった。我々はこの漱石の抱えた倦怠の思いを、明治の育穉の問題点として再考しなければならぬだろう。この問題は後年「坊っちゃん」の中で教育の問題としてテーマ化されることとなり、この時期の苦悩がずっと後年まで持ち越された形となる訳である。敢えて言えば、教職を辞めて「坊っちゃん」を書いたとき、初めてこの手紙で言うところの、△文学的の生活∨ができたと言えるのであろうか。

かつて小田切秀雄は、北村透谷が政治的な敗北から、文学者とし

ての戦いの道を切り開いていったことを積極的に認めしたが、同様に、漱石の場合も現実からの敗北感が、文学への参加を促しており、それが現実からの逃避ではなく、新たな現実を切り開くという営みであったという点で、透谷と基軸を同じくしていると思うのである。この二人はほぼ同年に生まれているのだが、誰もそれを信じていることができないほど、両者は異なっているかに見える。一方は若くして壮絶な生き様を晒し、他方は混沌として重厚な生き方をしめした。透谷はあの激しい漢文口調の文体で書かれた△評論▽というジャンルのなかに、全生命をかけて戦った。漱石はそれを△小説▽という、まだ明治の近代に未成熟であったものに取り組んだこと、(子規も小説を幸田露伴に見せているが、認められなかった)又、加えてそれが英文学を専攻していたこと、そして「文学論」の研究を経ることで、ようやく実現されたという事などを改めて考えてみると、漱石の混沌としたものの深さが自ずと理解できるのではないか。

教師を止めたいという気持ちは、教育に真剣であればあるほどおきがちなことであるが、かといって漱石の場合、文学的に自信があったかというともそれも難しく、漱石の混沌はまだまだ深みにはまっけていくかにみえる。しかしそこでは以前に子規にからかわれた時のような、ニヒリスティックなものには陥らず、たえずそこからの脱出と、再建の意図を十分に含んでいたことに注目しておきたい。それは次にあげる論文としての彼の仕事の中の、△知▽の有り方にかがえるのである。これらの文学に向かう姿勢が、後年の小説を生み出す母体になったであろうことは想像に難くない。

その論文と言うのは、「老子の哲学」「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」「中学改良策」「英国詩人の天地山川に対する観念」などである。今この「英国詩人の天地山川に対する観念(明治二六・三・六「哲学雑誌」)における、漱石の文学意識と、もう一つは、子規を中心とした雑誌、「ホトトギス」について検討してみることにする。それはこの二つのことが、後にロンドンで文学的に昏迷していた漱石を内側でささえ、そしてそれが大きな彼の文学基盤になっていたと考えるからである。

まずこの論文にみられる△天地山川▽というのは、言うまでもなく、自然を意味していた。そして文学上においては作家が描く塵芥(俗界)に対立する、自然界の風景のことである。ここで漱石が関心をもって研究しているのは、俗世界と自然界が文学の表現にとつて、どうあることがのぞましいのか、という点に關してである。

△ 人世に不平なれば、必ず之を厭ふ、世を厭ひて人間を辞職するものあり、小心の人これなり、世を厭ひて之を切り抜けるものあり、敢為剛氣の人これなり。濁世と戦って屈せざるものは、固より勇氣なくては叶はぬ事、五十年の生命を抛って、自ら憤満の肉を屠るもの、亦相応の勇氣を要すべし。かほどの勇氣なくして世に立つの才なく、又世を容るるの量なくば、如何にして可ならんか、餘命を風塵に托して、居ながら餓華たるを待つ、是一方なり、残喘を丘に養ふて、閑雲野鶴に伴ふ、是又一方なり、「クーパー」は此最後の策をとりしものなり、之を

とらざるべからざるの人物なり。▽

漱石は、ここでは、十八世紀末から十九世紀の始めへかけて、英国で生まれ出た自然主義 (naturalism) について、その発生の契機から解き起こして、様々な自然主義のすがたをあげ、最後に自然主義の到達点をあげている。自然主義の発生に関しては、古典主義時代の詩が、技巧にながれており、狭い上流社会での入俗気塵気の裏に生息して▽いる傾向があったとして、そこからようやく不満がおきて、△自然▽に目が開かれていき、そこに自然主義が勃興した、と捉えている。そしてこの後、彼にとっての漢詩がそうであったように、俗世間からの超脱の道としてのこの自然というもの、は、文学の一つの美の形として受け止められていたろうが、しかしその美に安住せず、その自然が人間の現実にとってどう働きかけているのか、という考察に及んでいる点にこそ注目したのである。この漱石の論文にとりあげられている英文学についてはここでは漱石の分析の切り口を見ておきたい。

この先にあげた文で、クーパーが自然のなかに自己を解放していたことをあげているが、然しクーパーの自然主義は、△わが安心を求むる為、是より浮世を御暇申す、俗世間の人々は勝手にせよ、と云ふが素志なり。▽であって、ここに詩の理想のありかたをみることはできまい、と続けて述べている。漱石が最も重視しているのは、△自然▽を△活動力▽にみたてた、バインズとワーズワースの二人に於てだった。つまり詩に現れる自然というものは、現実への再建を孕んでいなくてはならない、という掴み直しである。か

つて漢詩を通しての子規とのやりとりのなかで、自分の厭世感を否定され、現実での再建に歩み出した漱石の、ここでは新たな自己確認であったといえるのではないか。この問題は後に彼の文学テーマとなつて、「漾虚集」の中で現実と△夢▽のかかわりの問題として深められ、更に「草枕」の画工の脱現実の課題に連なつてゆくのである。「漾虚集」は一般にロマン主義の作品といわれ、また「草枕」は漱石の桃源境への旅、などといわれるが、そこには、狭義の意味でのロマン主義か自然主義かといった文学史による曖昧な概念規定に則った判断があるに過ぎない。漱石はそのロマン主義と自然主義という単純な区分けには、決してのらなかつた。それは、いわばリアリズムを志向するロマンチズムであり、ここにあげた△自然▽を△活動力▽にみたてた、バインズとワーズワースの自然観の発見の延長線上に置かれるのであった。このようにして、漱石のこの頃の英文学研究が、単なる教養に留まらず、極めて生きた△知▽の形としてあったことにこそ注意しておきたい。

しかしここで疑問なのは、英文学についてこれほど高い意識をもっていたにも係わらず、それから数年の後の英国留学でやはり文学的に混乱していたのはなぜだろうか、ということである。漱石ははじめ大学の講義を熱心に聞きにゆくが、すぐにやめて、家庭教師のクレীগ博士につくことになる。おそらくは、英国の文学についてのある失望というものがそこにあつたのではないか、と思うのである。それはともかくとしても、それから一年後には、△根本的に文学とはいかなるものぞという問題▽にぶち当たったことが「文学論」の中で語られていて、△余は社会的に文学はいかなる必要あつて、

存在し、隆興し、衰滅するかを究めんと誓えり✓と述べている。そこには今まで自分の内側で暖めていた文学意識が、個人の趣味的な領域を抜けでて、やっと文学が客観性をもちえることの自信が語られているように受け取れる。このことはまた、英文学を極めようとしてありとあらゆる書籍を片っ端から読まねばならない、という無謀な方法からようやく解放され、理論というものがいかに文学にとって必要であるか、という自覚に至ったことを意味している。しかもその自覚を後ろから支えていったのは、これまで、漱石の内側にあった漢文による文学性であったことは、間違いあるまい。△余は漢籍においてさほど根底ある学力あるにあらず、しかも余は十分これを味いうるものと自信す。✓と自らいつている通りであったらう。

漱石のロンドン時代については、非常に惨めな暮らしぶりが伝えられているが、「文学論」の序で、△余る一年をあげてこの問題の研究の第一期に利用せんと念を生じたり。✓と、ロンドンの孤燈の下で決意するのであるから、その通りだとすると、前半にくらべ、後半の生活は、精神的には非常に充実していたものと考えて良さそうだ。病床の子規に送った手紙や、ホトトギスに書いた通信（「倫敦消息」）を見ても、そこにはある明るさがみなぎっている。

この「倫敦消息」は、病床の子規を励ます意味もあって、ロンドンにいる自分の様子を伝える為に書かれた。その手紙は、外国に憧れ、もともと好奇心のおおせいな子規に、ロンドンのこととそこで漱石の暮らしぶりを、十分想像させる便りとなった。漱石の留学中は、子規にとって、一生の最後の命をふりしぼるようにして生きた数年であった。その子規にとって、漱石は掛け替えのない人であ

り、漱石にとっても同様であった。脊椎カリエスで、背中や臀部にいくつもの膿の穴ができて、その為寝たまま肘をつけてホトトギスの添削を続けるという状態だった。死の前年に漱石に書いた手紙には、悲痛な叫びが聞こえる。

△僕ハモーダメニナツテシマッタ、毎日涙モナク号泣シテイルヤ
ウナ次第ダ、ソレダカラ新聞雑誌ヘモ少シモ書カヌ、手紙モ一切廃止、ソレダカラ御無沙汰シテマス、今夜ハフト思ヒツイテ特別ニ手紙ヲカク、イツカヨコシテクレタ君ノ手紙ハ非常ニ面白カッタ、近來僕ヲ喜バセタ者ノ随一ダ。僕ガ昔カラ西洋ヲ見タガツテ居タノハ君モ知ツテルダロー、ソレガ病人ニナツテシマッタノダカラ残念ダタマライノダガ、君ノ手紙ヲ見て西洋へ往タヤウナ気ニナツテ愉快ダタマラス。若書ケルナラ僕ノ目ノ明イテル内ニ今一便ヨコシテクレヌカ✓

ここには痛ましいばかりの子規の姿がある。漱石も子規も、もう生きていく間に会うことはできないだろう、という決意をお互いに固めていたが、この手紙は、漱石が英国での自分の身のまわりのことを詳しく報告して書いたものに、子規が感動して書き送った手紙であって、後に「ホトトギス」に掲載されることになる。漱石の英国での生活については、今まで非常に惨めであった側面ばかりが強調されてきたが、然しこの「ホトトギス」と係わっている漱石の姿は、非常に明るいものになっている。特に子規に当てられた手紙は、すこしの暗さもなく、写生文による方法が、彼の平凡な日常を

写し取る中にも、自然と周囲への愛情に満ちた目が注がれているのが感じられる。それは同時に子規への心尽くしでもあったのだ。後年漱石は、写生文について、△大人が子供を視るの態度である。

(略) 写生作家の人間に対する同情は叙述される人間と共に頑是なく煩悶し、無体に号泣し、直角に飛躍し、一散に狂奔する底の同情ではない。傍から見て気の毒の念に堪えぬ裏に微笑を含む同情である(注三) といっているが、まさにこの写生文の方法がここで使われている。この「倫敦消息」という、ロンドンでの彼の生活の中心であった下宿にまつわる話は、給費留学生のため、貧乏だった漱石の目に映じた、この余り裕福でない町の人々の暮らしのいちいちを、丁寧に愛情をもって観察していて、特に下女のベンは実に愛らしく描かれている。漱石が彼女にどんな慈愛に満ちた思いを寄せていたことか、ここにはもはや、英国が異国ではないものとして、新たな風景として発見されたのだ。日本人がいなく西洋崇拜の固定観念を、物のあるがままの姿を写し取るという写生文の方法によって、新しい英国というものを漱石は開示して見せたのである。

この話が、病床で激痛に堪えながらも、中央志向ではなく地域を越えたところから来る全国の写生文の添削によって、言葉で繋がりを求めようとする子規の胸を打たないはずはなかった。こうして二人は、もはや生きて会うことはできない、ということを知りつつ、英国と日本の距離を縮めたのだ。——そしてそれは又漱石にとって、様々な煩悶となっていたこの西洋文化と、俳句や漢詩を通して早くから漱石の内側で培かれてきた日本文化との間にあったその距離を、縮める手がかりでもあったに違いない。こうして漱石の文学に

おける研究は、普遍的な文学論の確立に踏み込んでゆくことになるのである。

これまで述べてきたように、漱石が最初に出会った学問は、漢学塾での漢文であった。彼は特に漢詩に、漠然とした文学意識というものを擱んでいた。しかしそれは実学としての英語、あるいは英文学を選ぶことによって、その文学意識は、遠い彼方に押し遣られた。それが彼の厭世感と深く結び付いていた。しかしその厭世感には、子規との交友をバネとして積極的な物へと価値転換が図られ、さらに教育問題や、学問研究、そして写生文による対象との出会いをつうじて深められていった。さらにそれらは特に漢詩や十八・九世紀の英国詩人——自然主義の作家の脱俗の有り方と結び付くことによって、個人的な厭世感に留まらず、それが、現実の矛盾を如何に抱え込み、そこから文学は現実をどう救済するか、という普遍的な文学テーマに気付き、現実での再建の道を彼のために開くこととなった。

一方子規は、学生時代に漢文、漢詩、和歌、俳句、謡曲、小説と様々な文学ジャンルを試み、その後、江戸からの伝統であった俳句の革新に目覚めてゆくのだが、その革新とは、古さへの回帰とは全く逆の、様々な固定観念や見せかけを排して、物を自然のままにどう捉えるか、という方法化のための苦慮であったといえる。そして漱石も又、漢文学、英文学を通して混沌としていた文学意識は、子規の、物をそのままに写し取るという写生文の方法意識をうけて、より誇張のない自然な形象を選び取るという方法をものしたのであった。漱石が出会ったこの新たな現実の像は、さらに内部と外部、

内容と形式の因果関係を掘り下げることによって、一層明確化されていったに違いない。

これらの文学研究は実はすべて、以上みてきたように、明治という変動期の混沌の中におかれて、時代に翻弄されてきた漱石が、自己らしくあろうとするための方法をつかみとることであった。

ここでは漱石の抱えていた問題を極力考慮にいれながら、子規との書簡を通して、多少肉感的にその苦悩の過程を追いながら、一つ

文学」、1984・11

(注二) 「漱石研究」 平岡敏夫 「漱石『中学改良策』を読む」
の中で、教育問題への関心を、松山行きの動機と見ている。

(注三) 「写生文」 明治四十・一・二十「読売新聞」
尚、書簡はすべて「子規全集」(講談社版)によった

(一九八七・大学院修士課程終了)

(注一) 「透谷、漱石における自由と民権」 小沢勝美 「日本

法政大学国文学会会則

一九八四年度総会改正

第一章 名 称

第一条 本会は法政大学国文学会と称する。

第二章 目的および事業

第二条 本会は法政大学における日本文学研究の伝統を継承し、科学的創造的日本文学研究を推進することを目的とし、あわせて会員相互の親睦をはかる。

第三条 本会は前条の目的を達成するため左の事業を行う。

- (一) 研究会、講演会、親睦会の開催。
- (二) 機関誌その他の発行。
- (三) 他の学会、研究団体との成果の交換。
- (四) その他右の目的にそう事業。

第三章 会 員

第四条 本会は左の会員によって構成される。

- (一) 法政大学文学部日本文学科の現教員、および前専任教員。
- (二) 法政大学文学部第一部、第二部日本文学科
在学生および卒業生(旧制をも含む)。
- (三) 法政大学大学院人文科学研究科日本文学専
攻在学生および卒業生。
- (四) 法政大学通信教育部文学部日本文学科在学

- 生および卒業生、また高等師範部国漢科卒業
生で入会を希望するもの。
- (四) その他評議員会において推せんされたもの。

第四章 役員および機関ならびに会議

以下第五条第七条まで省略

第五章 会 計

第八条 本会の会費は、在学生は年額千二百円
(旧八百円)とし、卒業生は年額二千五百円と
し、入会金を千円とする。

第九条 本会の会計年度は毎年七月一日に始まり
翌年六月三十日に終る。